

令和4年度民学産公協働研究事業

研究成果報告書

地域共生社会における鑑賞教育と美術館の公共性

－八戸市美術館の事例を通じて－

まちづくり研究員

中嶋厚樹

目次

1. 概要	・・・P1
2. 研究の目的	・・・P1
3. 申請団体プロフィール	・・・P1
4. 協働研究の期間	・・・P1
5. 研究の背景	・・・P2
6. 研究方法	・・・P2
7. 結果と考察	・・・P2
8. 結語	・・・P18
9. 今後の計画	・・・P19
10. 謝辞	・・・P20

1. 概要

アートを活用したまちづくりを考えるうえで、鑑賞教育や公共性、社会包摂などの側面から現代に求められる美術館の在り方を研究する。

具体的には、青森県八戸市に2021年リニューアルオープンした八戸市美術館への視察及び参与観察を実施し、その取り組みの理解を深める。美術館の公共性についても様々な事例について文献調査を実施する。また、三鷹市民向けのワークショップを通じて、三鷹市民とともにアートや美術館について考え、これからのアートの見方、美術館の活用において、三鷹市としてどうあったらいいのか、あなたにとってどうあったらいいのか、対話を重視し、考える機会をつくる。ワークショップ参加者に限らず、ワークショップの結果を報告書として提示することで、三鷹市民へのアートを活用したまちづくりへの理解を深めたい。

2. 研究の目的

本研究では、先進的な取り組みの美術館視察や、ワークショップの実施により市民の声をきくことを通じて、これからの時代に求められる美術館における公共性について考えることを目的とする。協働研究事業を通じて、三鷹市が基本計画で掲げる市民が芸術文化に触れる機会の創出や、市民の文化活動の活性化に寄与する。

本協働研究事業は、特定非営利活動法人三鷹ネットワーク大学推進機構定款第4条に定める特定非営利活動のうち、(4)学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動に、関連する。

3. 申請団体プロフィール

申請者 中嶋厚樹（なかしまあつき） まちづくり研究員

株式会社スタジオジブリ 学芸員

立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科比較組織ネットワーク学専攻博士課程前期課程

三鷹まちづくり総合研究所まちづくり研究員 第1期

東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」第8期

文化庁ミュージアムエデュケーション研修 修了 第10期

三鷹市市民参加でまちづくり協議会員

4. 協働研究の期間

2022年6月30日～2023年2月15日

5. 研究の背景

社会的な背景としては、地域共生社会と呼ばれる社会構造や暮らしの変化に応じて、制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会の実現が求められている現代において人と人との繋がりが重視され、社会的フレイルと呼ばれるような社会活動への参加や社会的交流に対する脆弱性が増加している状態が社会課題とされている中で、居場所としての美術館の可能性や、コミュニケーション手段としてのアートの可能性を考え、美術館の公共性が再検討されるべきと考えたことが研究のきっかけとなった。

個人的な背景として、2019年より三年間、東京都美術館と東京藝術大学が行なっているアートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクトに参加し、アート・コミュニケーターとして活動する中で、アート・コミュニケーション事業を三鷹市のまちづくりにも活かしたいと考えていることもこの研究の背景である。

6. 研究方法

- (1) 八戸市を往訪し、八戸市美術館及び近隣施設の見学、美術館関係者に聞き取り調査を実施。
- (2) 三鷹市において、「美術館」に関する鑑賞ワークショップを開催。三鷹市民を中心に参加者を募り、アンケート調査を実施。
- (3) その他、鑑賞教育や美術館における公共性について、文献調査を実施。

7. 結果と考察

(1) 八戸市美術館 訪問

2022年7月24日、八戸市美術館を訪問し、八戸市美術館の成り立ちから現状について、高森大輔副館長に話を伺った。

青森県八戸市は、青森県東部に位置する中核都市であり、青森市、弘前市とともに青森県主要3都市の一角を構成している。

今回の調査対象を八戸市とした理由としては、文化芸術創造都市であり、アートを活用したまちづくりを実践されていること、また、人口の規模としては、概ね三鷹市と同程度であり、今後の三鷹市のまちづくりに参考になるのではと考えたことである。

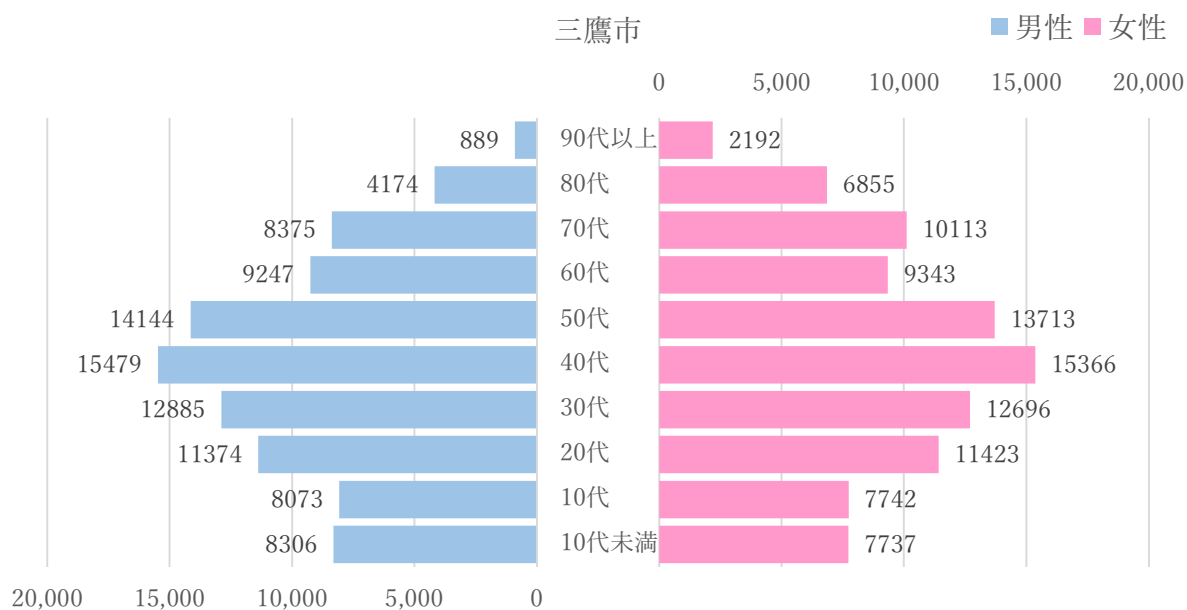
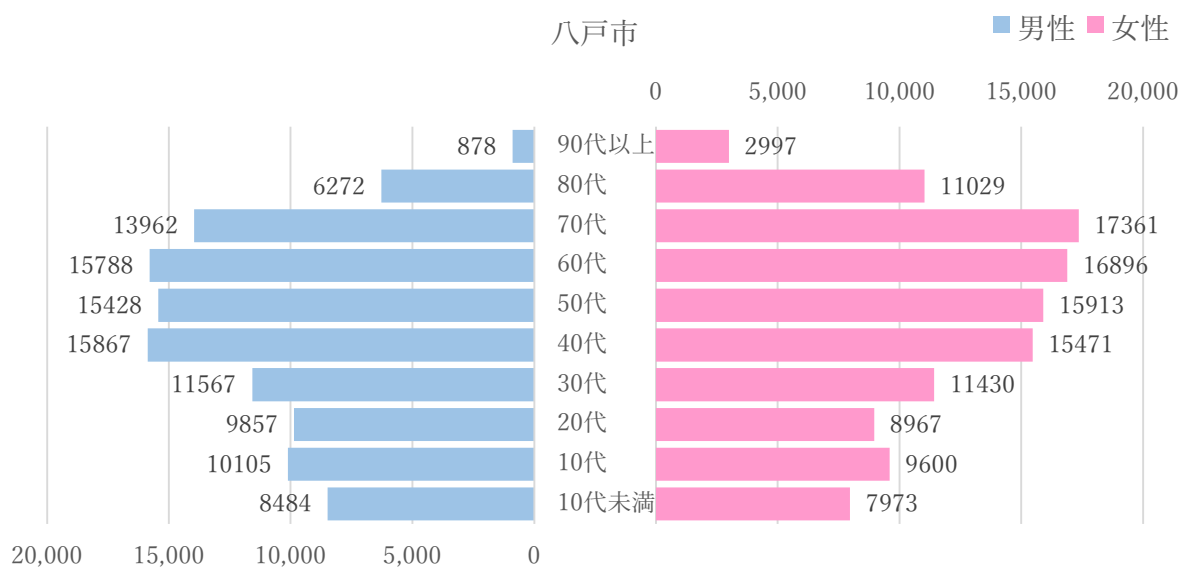
年齢別の人口構成についても高齢者の割合がより高いことを除いては、概ね似たような人口構成となっている。

学校の数としては明確に違うが、八戸市は小規模な小中学校が多いためである。

2021年1月1日現在人口構成 八戸市 三鷹市 比較 (統計資料より筆者作成)

	総人口	男性	女性
八戸市	225,845	108,208	117,637
三鷹市	190,126	92,946	97,180

	小学校数	中学校数
八戸市	42	24
三鷹市	15	7





八戸市美術館およびジャイアントルーム（筆者撮影）

八戸市美術館は、アートを通じた出会いが人を育み、人の成長がまちを創る「出会いと学びのアートファーム」をコンセプトとし、従来の「もの」としての美術品展示が中心だった美術館とは異なり、「ひと」が活動する空間を大きく確保することで、「もの」や「こと」を生み出す新しいかたちの美術館として、新たな文化創造と八戸市全体の活性化を図ることを目指している。

また、八戸市美術館の新設を前に、八戸市では地域観光交流施設「八戸ポータルミュージアム はっち」や、八戸市の公営書店「八戸ブックセンター」といった施設があり、これらの存在も非常に重要な存在として、地域の文化芸術の発展に寄与している。

八戸市美術館の象徴的な存在として、ジャイアントルームがある。様々な背景の人々が老若男女問わず同じ場を共有できる広さがあり、可動間仕切りや家具で自在に場所をつくれる他、市民が自由にその空間を享受できるようになっている。来館した当日も机で勉強する中高生もいれば、小さなお子様を連れてお母さん、ギャラリーを観に来た高齢者がそれぞれの時間を過ごしていた。展示や創作の場となる個室群も備え、様々な組み合わせで自在に場所をつくり、ゆるやかにつながれることであらゆる活動を可能としている。

また、学校連携プロジェクトとして、美術館の学芸員や専門家、学校の教員らが参加のプロジェクトから生まれた小中高が一緒になって鑑賞するプロジェクトをはじめ、同じテーマで作品をつくるプロジェクトなど美術館を中心に小中高や、学校単位の垣根を超えて、主体的な鑑賞教育や活動が生まれている。

さらに八戸市内の大学や高等専門学校の専門性と美術館の専門性を活用して、活発的に交流があることも一つの特徴である。美術館内の施設や近隣施設の利用に置いてもそのような光景をうかがうことができた。

地域共生社会に当てはめていえば、『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、美術館、学校、地域の多様な主体が参画し、美術館を拠点にアートを介したコミュニティ形成が実現している。



八戸ブックセンター（筆者撮影）



八戸ポータルミュージアム はっち（筆者撮影）

【八戸市美術館 概要】 ※八戸市美術館 HP 及び提供資料より、一部抜粋して筆者作成

敷地面積 6,732.14 m² 建築面積 3,080.21 m² 延床面積 4,586.42 m²

鉄骨造 地上3階 高さ 約19m

本棟工事費 約32億円

国土交通省所管の社会資本整備総合交付金「都市再構築戦略事業」を活用（補助率1/2）

- 1986年 八戸市美術館 開館（青森県内最初の博物館法に基づく美術館であり、八戸市博物館の分館として設置。
- 2005年 小林市長就任、マニフェストに「多文化都市八戸推進会議の設置」を掲げる。
- 2008年 文化政策担当部門が教育委員会から市長部局所管に替え、スポーツ振興と統合し、文化スポーツ推進課設置
- 2009年 小林市長二期目、マニフェストに「アートのまちづくり」、「はっちを核とした街の演出」を掲げる。八戸市芸術文化施設連絡協議会設置。
- 2010年 文化政策とまちづくりの一体的運営のため、まちづくり文化推進室を設置。第5次八戸市総合計画に「アートのまちづくり」が盛り込まれる。
- 2011年 八戸市地域観光交流施設 八戸ポータルミュージアム はっち 開館
教育委員会からまちづくり文化観光部（当時）へと所管が変わり、まちづくりの役割も担うようになる。
- 2013年 小林市長三期目、「文化のまちづくりビジョン策定」、「写真のまち八戸」、「アート空間の創出・アートイベントの開催」を掲げる。
- 2014年 文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）受彰
- 2015年 八戸市文化のまちづくりビジョン 策定
耐震性の問題や収蔵・展示環境拡充の必要が生じる中、市民団体から新美術館建設を求める陳情書が議会採択。
- 2016年 新美術館整備が始まる。青森銀行八戸支店新店舗の整備と合わせた一体的な協調開発を行うことにより事業用地拡大。
八戸市新美術館整備基本構想を策定し、公募型プロポーザルを実施。
西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジオ設計共同体を設計者として選定。
- 2016年 八戸市公営書店 八戸ブックセンター 開館
- 2017年 （旧）八戸市美術館 閉館
- 2018年 八戸まちなか広場 マチニワ 開業
- 2020年 八戸市美術館 本棟竣工 文化芸術推進員 採用（～現在）
- 2021年 八戸市美術館 開館
- 2022年 「はちのへ文化のまちづくりプラン」策定
八戸市美術館 グッドデザイン賞受賞およびグッドデザインベスト100に選出

(2) 市民とともに美術館を考えるワークショップの開催

【募集期間】2022年10月10日～10月22日

【募集告知】三鷹ネットワーク大学 公式HP メールマガジン FB チラシ配架
まちづくり研究員、市民参加でまちづくり協議会等 SNS

【応募総数】56名

【メインビジュアル】



ワークショップ応募時事前アンケート

男女比はほぼ半々であったが、年齢構成比は、60代が全体の4割を占め、70代以上も合わせると6割近くになった。アートや美術館をテーマとして設定したこともあり、高齢者が関心を持っていただく一因となった他、対話を通じたアート鑑賞は、アート思考や認知症予防でも注目されていることから関心が高かったと思われる。

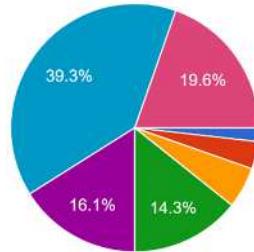
課題としては、告知方法で若者へ情報が届く方法として適切でなかったと考えている。また、ワークショップ当日は、三鷹市民駅伝が開催されており、市民駅伝の参加者、ご家族、友人の応援などで、仮に情報を目にしているにもかかわらず、応募しなかった可能性が高い。

居住地の構成比は、77%が三鷹市民からの応募となった。

美術館への来館頻度は月二回以上から年一回程度までまんべんなく応募があったが、ほとんどいったことがないという回答がゼロとなり、美術館に関心がない層を巻き込むことはできなかった。

あなたの年代を教えてください。

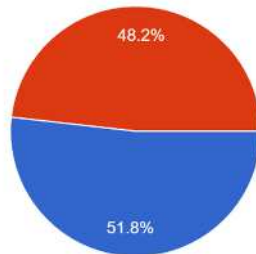
56件の回答



- 10～19歳
- 20～29歳
- 30～39歳
- 40～49歳
- 50～59歳
- 60～69歳
- 70歳以上
- 回答しない

あなたの性別を教えてください。

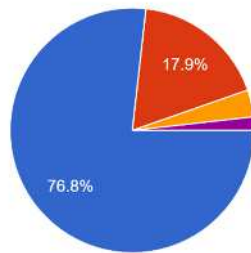
56件の回答



- 男性
- 女性
- 回答しない

居住地を教えてください。

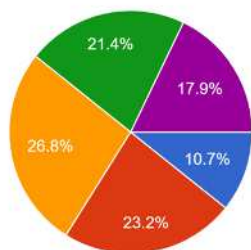
56件の回答



- 東京都三鷹市
- 三鷹市以外の東京都
- 神奈川県
- 埼玉県
- 千葉県

美術館に通常どのくらい行きますか？(コロナ禍以前の状況でお考えください)

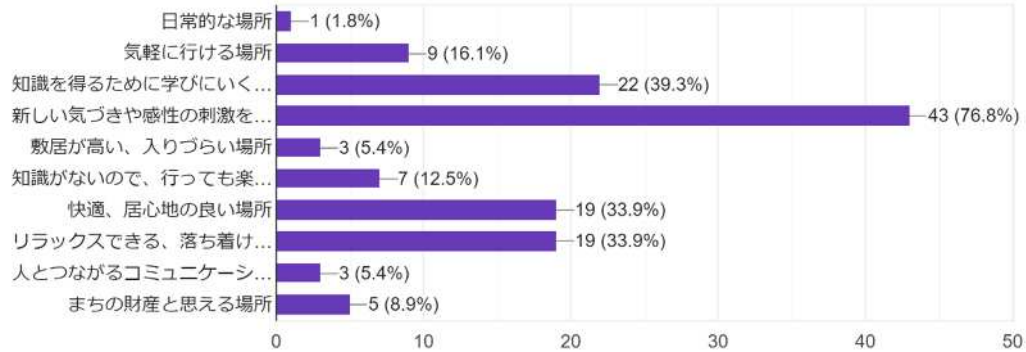
56件の回答



- 月に2回以上
- 月に1回程度
- 2～3カ月に1回程度
- 6カ月に1回程度
- 年に1回程度
- ほとんど行ったことはない

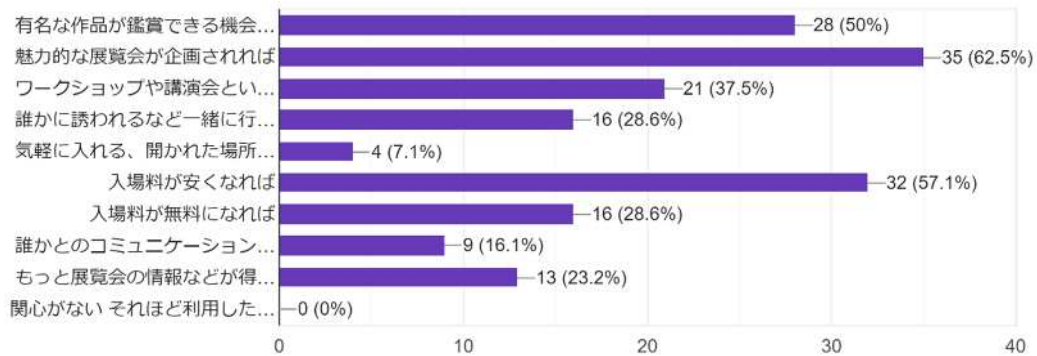
あなたにとって〈美術館〉はどのような存在ですか？(複数回答可)

56件の回答



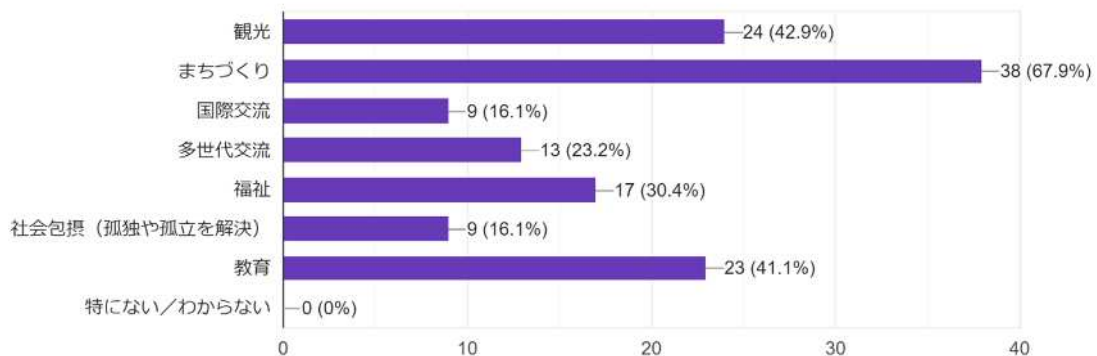
どうなったらもっと美術館を利用したいと思いますか？(複数回答可)

56件の回答



文化芸術の持つ可能性を活かして欲しいと思う分野はありますか？(複数回答可)

56件の回答



ワークショップ実施報告

【タイトル】 アートを対話で楽しもう # 2 美術館を語りませんか？

【日時】 2022年11月27日(日) 10時~12時

【場所】 三鷹ネットワーク大学 教室 ABC

【参加者】 20名 アンケート回収率 100%

ワークショップの実施にあたり、アート・コミュニケーター 5名および三鷹市市民参加でまちづくり協議会マチコエより7名にボランティアで協力していただいた。

アート・コミュニケーター

安東由美 柴田光規 野口真弓 牟田真弓 和田奈々子

三鷹市市民参加でまちづくり協議会

青出木悠人 越智敏裕 小林大輔 曾我映理子 谷合美香 林賢 三谷真美

(敬称略 あいうえお順)

【プログラム内容】

アートを対話で楽しもう！

対話型鑑賞(VTS)の簡単な紹介とともに、対話を通じてアート鑑賞する体験の機会をつくった。ファシリテーターには、東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」よりアート・コミュニケーターを迎え、実施した。

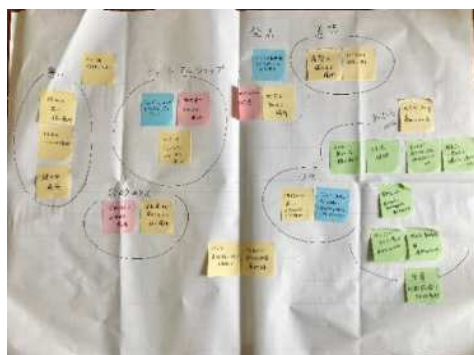


美術館を語ろう

八戸市美術館の事例紹介をきっかけに、参加者にとって美術館はどんな場所なのか、どんな場所であって欲しいか、グループごとに付箋をつかったワークと対話を行ない、終了後に代表者による発表を行なった。



付箋を使ったワークでは、あなたにとって美術館はどんな場所ですか？という問いを設定し、各グループにて対話を行なった。具体的な美術館を挙げて、その美術館の特徴から自分が感じることを話したり、建物やショップ、カフェなどに話し合いが及ぶグループもあった。また、主観的な視点で感性を磨く、ゆっくりする、憩いといった言葉が出る一方で、これからの美術館を展望し、親子でもっと行きやすくなってほしい、三次元で体感できる美術館といった話題など多岐におよんだ。

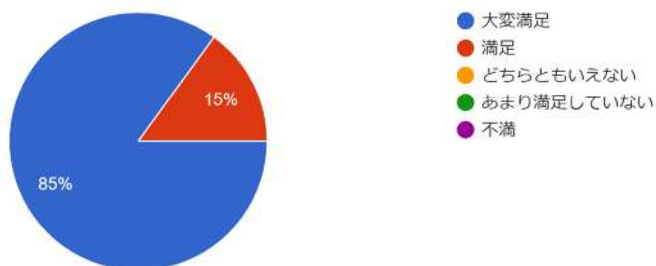


◆参加者による事後アンケート結果

総じて、ワークショップの満足度は高かった。対話を通じたアート鑑賞についても参加者からは、「楽しかった」「目からウロコだった」など好意的なコメントが寄せられた。一方で、アート鑑賞に変化があるかという問いについては、同様に好意的なコメントがあるだけでなく、“どちらともいえない”という意見も見られた。

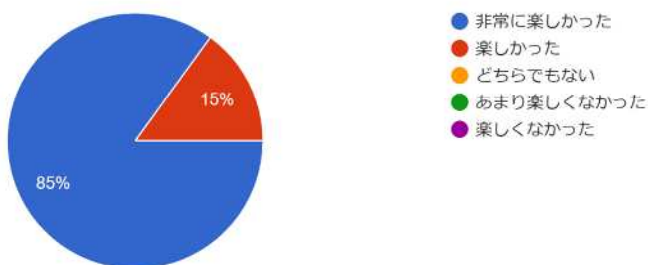
「アートを対話で楽しもう！」に参加されていかがでしたか？

20件の回答



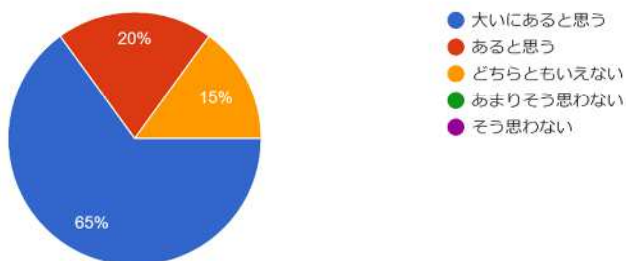
対話を通して作品を鑑賞することについて

20件の回答



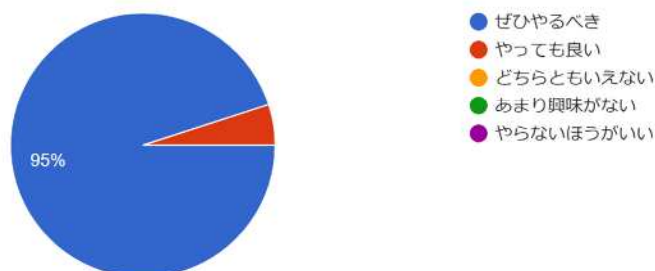
ご自身のアート鑑賞に変化があるか

20件の回答

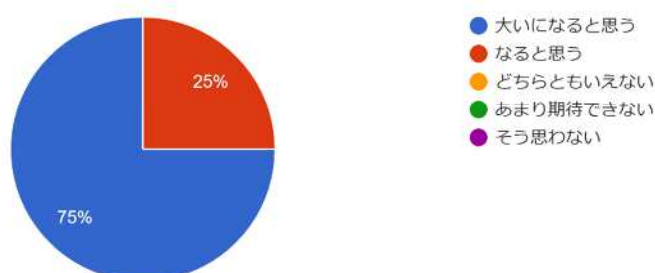


本日のような交流の場を三鷹市のまちづくりとして活用していく取組みについて、ざっくりとした聞き方ではあるが、満足度や楽しさ以上に、“ぜひやるべき”が95%と非常に関心が高いことがわかった。多世代交流についても、アートを活用したコミュニケーションやコミュニティ形成の可能性を感じてもらえる結果となった。

アートコミュニケーションをまちづくりに活用していく取組みについて
20件の回答



多世代交流のきっかけになるか
20件の回答



《 印象に残っていること（自由記入欄） 》

- ・一つの絵を皆で対話しながら見るという経験ははじめてでとても興味深かった。
- ・単純に情報交換の場としても楽しめた。
- ・それぞれの見方を聞いているとそのように見えてきた。見えていないものに気づいた。
- ・同じ作品を見ていてもそれぞれの感じ方の違いから様々な気づきが生まれてとても楽しかった。
- ・はじめて会ったメンバーとも会話が弾み面白かった。
- ・自分では気づかない見方に気づかせていただくのがとても新鮮で嬉しい発見だと感じた。
- ・美術をもっと「そのもの」から感じることを大切にしたいと思いました。
- ・他の参加者の見方から、作品やその周辺を知りたい、参加者のことも知りたい、次々自分の中に湧き上がってくる考えがあり、楽しく、嬉しかった。
- ・地域の人々のつながり、交流をはかるために、楽しくとても有用な企画だと思います。

- ・0歳から30歳くらいの若い子の話も聞きたい。
- ・一枚の絵によって、いろいろな人の考えを聞けてとても楽しかった。対話をして知識が広がる気がする。
- ・場所にこだわらず、アートを通してコミュニケーションが生まれることが面白かった。
- ・社会課題（高齢化問題等）について話が移り、地域について考える機会になった。
- ・美術館では名画を見るものと思っていたが、いろいろな使い方ができるといいと思う。
- ・芸術のいやしについて興味がある。
- ・ひとりで見るときと大勢で見るときの感じ方の違いに気づき、楽しかった。
- ・大学など、同じような世代の人間同士では出てこないような着眼点や発想を持つ方々とお話できたことで、視野が広がったと感じました。VTSの時間は発見ばかりでとても楽しく参加できました。
- ・ひとりで見ているだけでは気づかない絵の背景や見方を知ることができました。ファシリテーターの方も話しやすい場づくりをしていただき、絵についてコメントしたことが、間違っていないのかなという不安を解消することができました。
- ・自分が美術館についてどう考えているのか、絵をどう見ているのか知るきっかけになりました。
- ・子どもたちと一緒にやるとどんなふうになるのか気になった。意外なコメントがたくさんできそうな気がします。
- ・アートの見え方が対話を通じてどんどん変わっていくのが体感でき、とても面白い経験になりました。
- ・時空を超えた自分自身と向き合う素材の対話の場所。言語などで分断された世界で人々をつなぐツールになると感じた。
- ・フランスでは第9の芸術としての漫画、アニメがあり、日本作品が世界に拡散しているので、今後の未来の可能性を感じる。
- ・1つの絵から、思わぬ気づきを得られる驚き。交流ツールとしてまちづくりなどもっと活用すべき。
- ・大変興味深いワークショップでとても楽しく参加させていただきました。ファシリテーターの方たちの対応が素晴らしく、とても助けになりました。新しい見方で美術鑑賞ができます。
- ・府中市美術館のキュレーターが素晴らしく、企画が毎回楽しいと友人が知っている。三鷹市にも頑張りたいと思いました。市民に身近な美術館があると（有名な絵がなくても）嬉しく思います。
- ・一度は見たことのある絵＝親しみがある、なじみがある絵だったおかげで、リラックスして注視できました。今まで気づいていなかったこと、別の見方も、グループメンバーの視点を知って連鎖するように開花したので、楽しい気づきがたくさんありました。また参加したいので、機会が増えますように。

(3) 地域共生社会における鑑賞教育や美術館の公共性に関する文献調査

鑑賞教育の実践と美術館の公共性

はじめに、齋藤（2000）¹は、公共性は、同化／排除の機制を不可欠とする共同体ではない、それは、価値の複数性を条件とし、共通の世界にそれぞれの仕方に関心をいだく人びとの間に生成する言説の空間であると述べている。

美術館を同化／排除の機制を不可欠とする共同体でないとして、誰でもが参加可能な美術館賞、鑑賞方法、感じ方、見方も様々、同化する必要は全くない空間と見たうえで、鑑賞教育における公共性について考えていく。

近年、全世代に向けた鑑賞教育の必要性が注目されている。末永（2020）²は、「アート思考」を「自分だけの視点」で物事を見て、「自分なりの答え」をつくりだすための作法とした上で、私たちが美術で学ぶべきだったのは、作品の作り方ではなく、むしろその根本にある「アートのものの考え方＝アート思考」を身に着けることであり、美術は今大人が最優先で学び直すべき科目であると述べている。また、山口（2017）³は、昨今、多くのグローバル企業やアートスクールにおいて、「見る力」を鍛えるために、さかんに実施されているのがVTS（＝Visual Thinking Strategy）であるとして、自身の実践を通して、VTSのセッションでは通常の美術教育において行われるような、作者や作品に関する情報提供はほとんど行われない。その代わりに、セッションの参加者には、徹底的に作品を見て、感じて、言葉にすることが求められる。その場において自分にとって自明と思われることが、必ずしも他人にとっては自明でないという学びであることや、VTSでの「何が起きているか」という問いは、ビジネスの世界で経営者が議論しなければならない最重要な論点と同じであることを指摘している。さらにニューヨーク近代美術館で「認知症当事者と家族を対象とする対話型アート鑑賞プログラム meet me at MoMA」での視察を通じて衝撃を受けた林（2020）⁴は、日本で、プログラム「アトリップ」を実践し、①認知症当事者、②同伴する家族や介護士、③アートコンダクター、④美術館あるいは施設関係者、⑤プログラムスタッフの関係する5者にとってメリットがあるという意味で5 WINSのプログラムであると述べている。

鑑賞教育の実践は世代を問わず、認知症当事者も含めて広く行われており、誰もが参加できる、同化／排除の機制を不可欠とするという点においても美術館における公共性の表現の一つと見ることができるのではないだろうか。鑑賞教育の実践の場としての地域社会における美術館の可能性は美術館の公共性という意味でも意義がある。

¹ 齋藤純一『思考のフロンティア 公共性』岩波書店,2000年,p6.

² 末永幸歩『「自分だけの答え」が見つかる 13歳からのアート思考』ダイヤモンド社,2020年,pp.13-14.

³ 山口周『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?』光文社,2017年,pp.218-220.

⁴ 林容子『アトリップ入門』誠文堂新光社,2020年,p.123.

美術館を含めた博物館について伊藤（1993）⁵は、博物館を地域志向型、中央志向型、観光志向型の三つに分類した。教育方法の軸として、地域志向型は、ものを考え、組み立て、表現する能力の育成が中心とし、中央志向型は、知識の教授が中心、観光志向型は、資料のもつ意外性、人気性が中心としているが、実際の博物館は三つの型が同居している場合が多く、目的の異なる物が混在しているため博物館の性格があいまいになりがちと述べている。

地域財を活かした鑑賞教育の実践という意味では、地域志向型が望ましく、より地域に根差した美術館の在り方を模索できるような環境が望ましいのではないだろうか。

地域社会と美術館の公共性

暮沢（2022）⁶は、フランスの地方都市ボルドーにある現代美術館 CAPC について、もっとも示唆に富んでいる点は室内環境であるように思うと述べ、ワイン倉庫を転用したこの美術館には産業的な記憶の集積があり、文化的な記憶も集積される、美術館というメディアにとって最も本質的な問題である「記憶」を、室内空間と歴史的経緯の二つの側面から問いかける存在になっている他、現代美術館 CAPC は主に地元の小中学生を対象にしたワークショップにも力をいれていて、それらの活動は常に大規模なインスタレーションやコレクションとも密接にリンクしているというと述べている。

大林（2019）⁷は、フランス・ナント市の事例として、文化事業の実現には行政トップの強いリーダーシップが不可欠としたうえで、エロー市長が文化事業を含む都市計画で、一貫して重視したのは「市民の質を高める」という視点だとして、経済効果よりも幅広い市民に豊かで多様な文化を提供するプロジェクトを実施したと述べている。

今村・佐々木（2021）⁸では、釧路市立美術館の成り立ちについて、そもそも美術館を釧路市でつくろうとした大きな理由の1つが、何か核になる作品があって、それを公開するためというよりも、大都市にあるような大きな美術館にいかねば見ることができない展覧会を、地方都市でも開催して市民に鑑賞の機会を提供するということにあった。あくまでも所蔵作品を見せるというよりも、美術館という整った環境を整備することが目的で、他の館から「作品を借りて展示する」ことが設立当初の重要な部分であったとされている。

国内外問わず、美術館の在り方は「市民」というキーワードで地域社会に存在しているケースが増えてきている。三鷹市における美術館の公共性を考えるとしても、箱ものをつくることありきや、ブロックバスターと呼ばれるようにとにかく人が集まったかどうかで評価するような考え方ではなく、市民目線で活用され、幅広い市民に芸術文化を提供できるような環境が検討されるべきであろう。

⁵ 伊藤寿朗『市民のなかの博物館』吉川弘文館,1993年,pp.15-16.

⁶ 暮沢剛巳『ミュージアムの教科書 深化する博物館と美術館』青弓社,2022年,pp.26-27.

⁷ 大林剛郎『都市は文化でよみがえる』2019年,集英社,p.75.

⁸ 今村信隆・佐々木亨編『学芸員がミュージアムを変える!』水曜社,2021年,p187.

芸術文化の価値

河島伸子ら (2020)⁹によると、イギリスにおいて、1990年代後半に社会包摂政策に積極的に貢献するという号令が各省庁に飛び、それまでヨーロッパの中では文化政策に対してどちらかという消極的であったが、2000年前後より「経済に貢献する文化」から「社会包摂に役立つ文化」という考えが大きな存在になったという。その中で社会包摂的な文化政策を、文化活動に関与しづらい人々に歩み寄り、彼らの鑑賞・創造活動を支援することと述べている。

近年のこうした背景は、日本においても何らかの一つ以上の理由で文化的に排除されている人々の文化へのアクセスを改善する動きとして注目されている。

藤本 (2014)¹⁰は、かつての日本では濃密な人間関係があり、近所でも職場でも、プライバシーにかかわることまで互いに知っていたが、社会は大きく変化し、地域社会でも職場でも人間関係は希薄化し、家庭は小さくなり、家庭を持たない人も増えているとして、日本では普通の人々が社会的に孤立することが特徴であり、課題でもあると指摘している。近年の社会課題である社会的孤立も文化的に排除される一因であろう。

そうした社会的孤立を解決する方法として注目されているのが、社会的処方である。西ら (2020)¹¹は、社会的処方を患者の非医療的ニーズに目を向け、地域における多様な活動や文化サークルなどとマッチングされることにより、患者が自律的に生きていけるように支援するとともに、ケアの持続性を高める仕組みとして紹介し、「眠れない」という患者がクリニックに来たときに、本人のニーズが好みなどを把握したうえで、医師が睡眠薬を処方するかわりに、社会資源を提供するということと例をあげて述べている。

社会的処方としての美術館の活用や、鑑賞の実践など、社会的孤立に対して、芸術文化の価値を届けることは、今後ますます需要が増えていくのではないだろうか。

ジェフリー・クロシックら (2022)¹²は、「芸術活動への参加、そして芸術教育を受けることの重要性は、一般的なスキルや移転可能なスキルを獲得するというのではなく、あらゆる学習に必要とされる思考習慣を育むと捉える方が適切だろう。例えば好奇心や可能性を追求すること、楽しんで繰り返し練習すること、当たり前のことを当たり前と思わないこと、強い批判精神を育てることなどである。」と指摘している。

誰もが社会的孤立に陥り易く、文化的に排除された状態を解決する手段としても、鑑賞教育や美術館の活用は注目されるべきだろう。その中で、芸術活動や芸術教育をスキルの獲得ではなく、コミュニケーションとして追求することは、美術館の公共性を考える意味でも芸術鑑賞というハードルをさげる一因になるだろう。

⁹ 河島伸子ら『新時代のミュージアム』ミネルヴァ書房,2020年,p59.

¹⁰ 藤本健太郎『ソーシャルデザインで社会的孤立を防ぐ』ミネルヴァ書房,2014年,pp2-11.

¹¹ 西智弘ら『社会的処方』学芸出版社,2020年,pp25-26.

¹² ジェフリー・クロシックら/中村美垂訳『芸術文化の価値とは何か』水曜社,2022年,p253

対話の可能性

最後に、鑑賞教育の実践として、ワークショップ「アートを対話で楽しもう！」を行なったが、対話の重要性についても、文献調査より事例を紹介する。

和田（2022）は、高齢者の生活習慣について、勉強したことをただ知識として頭の中に蓄えるのではなく、そのときそのとき考えたことや感じたことを発表すると、前頭葉が大きく刺激されることを指摘した上で、高齢者の脳を刺激するのは、インプットよりアウトプットだと述べている。また、斎藤（2014）¹³は、フィンランド発の社会ネットワークを活用した精神科ケアとしてオープンダイアログを紹介しているが、伝統的な精神科治療よりも、重要なことは「開かれた対話」と述べている。

医学的な面で対話が注目されていることを、対話を活用したアート鑑賞と直接的には結びつけられないが、鑑賞教育を充実させる意義や、美術館をより開かれた公共的なものにしていくという意味で対話は大きな核であり、注目されるべきであることを述べておく。

家庭でも職場でもない第三の場として「サードプレイス」を提唱するレイ・オルデンバーグ（2013）¹⁴は、サードプレイスの機能のなかで最も崇高でありながら、もはやどこでもほとんど実現されなくなったのは、若者と大人と一緒にくつろがせ、楽しませる機能と述べ、サードプレイスは年配者のためになるが、多くの高齢退職者は、地域が彼らに提供するものも、彼らを近隣住民やコミュニティと結びつけておく手段も、ほとんどもっていないとは嘆かわしいと指摘している。

高齢化社会の福祉としても、鑑賞教育の実践や美術館の公共性を考える上で、対話は重要な要素であり、多世代交流が日常的に実現するようなサードプレイスとしての美術館像も求められてくるのではないだろうか。

8. 結語

今回は、美術館の公共性を考え、アートを介したコミュニティ形成、まちづくりとしての可能性について考えた。

八戸市美術館におけるフィールドワークでは、八戸市の文化政策および芸術文化を核としたまちづくりの実践の一端を感じることができた。八戸市美術館がリニューアルオープンしたという一つの事実にとどまらず、長い時間をかけてこの地域を着実に積み上げていることが見て取れた。

三鷹ネットワーク大学でのワークショップでは、昨年度に引き続き三鷹市民を中心に高い関心を寄せていただくとともに、参加いただいた市民の皆様には鑑賞教育といえおこがましいが、“アートを対話で楽しもう！”という言葉そのままに、積極的に参加していた

¹³ 斎藤環『オープンダイアログとは何か』医学書院,2014年,p21

¹⁴ レイ・オルデンバーグ／忠平美幸訳『サードプレイス』みすず書房,2013年,pp21-22.

だき、三鷹市においてもまちづくりとしてのアートを紹介したコミュニティ形成について、これからもやっていくべきというご意見とともに背中を押していただいた。

今回の報告で示したことは小さな一歩であるが、三鷹市民にとっても、鑑賞について考えるきっかけであったり、美術館について考えるきっかけだったり、市民としてまちづくりについて考えるきっかけになれば幸いである。

三鷹市でワークショップを実施する意義として、対話を通じたアート鑑賞作品に、三鷹市立アニメーション美術館に関連する絵画（パブリックドメイン）を作品選定したことは好評であった。三鷹市立アニメーション美術館を通じて、三鷹市にはスタジオジブリのアニメーション作品との地縁もある。アニメーションと西洋絵画について三浦（2021）¹⁵は、アニメーションを構想したうえで、その一コマを切り取ってみせたのが西洋絵画だったのではないかと考えることができると述べているが、アニメーション作品を芸術の一つとみなして、地域社会の中でワークショップや鑑賞教育として活かしていくことは、三鷹市独自の鑑賞教育を育てていく可能性もあるのではないだろうか。

また、今回の課題として、ワークショップで市民の声を聴く一方で、世代的な偏りが出てしまった。特に中高生といった子どもたちにはなかなか届いておらず、どのようにアプローチするか、方法を工夫するとともに、もっと広く認知度をあげていく必要がある。

小林真理他（2022）¹⁶は、子どもたちへの芸術体験の重要性として、文化資本も世代を超えて継承されていくと指摘した上で、文化を愛しみ、楽しむ素養は、子どもの頃に形成され、それはさらにその子どもや孫にも引き継がれていく可能性を指摘している。そういった意味でも、三鷹市の子どもたちに向けた鑑賞教育やワークショップ実践の場を届けていく意義がある。

9. 今後の計画

昨年度に引き続き、「アートを対話で楽しもう！#2」を開催させていただいたが、今回は会場も東京都美術館から三鷹ネットワーク大学に移し、よりローカルな形で実施した。コロナ禍での実施ということもあり、自主的に人数を制限しての実施となってしまったが、応募状況も含めて多くの三鷹市民の興味関心をもってもらえたと感じている。

どのような形がよいのか模索中ではあるが、「アート思考」や「対話型鑑賞」という言葉が三鷹市民にとってもっと身近になるように、鑑賞教育といえば大袈裟かもしれないが、難しいものという思い込みを壊すことができるように、アートを対話やコミュニケーションの手段として楽しむ場づくりを普及啓発していけたらと考えている。

また、社会的孤立、社会性フレイルといった切り口を提示した結果、参加者、応募者と

¹⁵ 三浦雅士『スタジオジブリの想像力』講談社,2021年,p35

¹⁶ 小林真理ら『自治体文化行政レッスン55』美学出版合同会社,2022年,p91.

もにたくさんの高齢者の方に関心を持っていただけたと思うが、鑑賞教育は世代を問わず有益であると考えており、今後は、子育て世代のご両親や、子どもたちにも何かのきっかけを届けることができれば幸いである。

今回は、昨年度以上に、文献調査という意味でも、アートと美術館、社会包摂、社会的処方と多方面から、研究させていただく機会をいただき、あらためて客観的に自分の研究を見つめる機会となり、充実した時間であった。

八戸市美術館への往訪についても、今回は1泊2日と限られた時間のなかで、十分なフィールドワークや参与観察にはいたらなかったこともあり、今後も再訪の検討含めて、引き続き八戸市美術館の取組みについては注目していきたい。

10. 謝辞

今回の民学産公協働研究事業にご協力いただいた皆様に感謝いたします。(敬称略)

八戸市美術館

副館長 高森大輔

松倉寛幸

大澤苑美

田村由衣

平井真里

八戸ポータルミュージアム

館長 加藤公

八戸ブックセンター

所長 音喜多信嗣